

## 道橋普請へのこころみ

文 中野 東禪

山田湾の北よりに、大沢という所がある。その袴田はかまだの作造鼻さくぞうはなというところは、なだらかな沢が、南向きに湾にむかつておちこんでいる。その中ほどに、南無阿弥陀仏と刻んだ小さな石碑と並んで、六角形で、高さ一メートルほどの石ぶみがある。端正な文字でこう刻んである。

一、道橋普請供養塔

一、普請惡難所百八箇所

一、和井内邑薬水湯開起

一、人足六万九千三百八十四人

一、宝暦元年より同十二年迄

一、願主林宗六世牧庵鞭牛大和尚

宝暦元年（一七五一）、鞭牛和尚は四十二歳である。

この地の代官所は大槌町おつちにあった。橋野村から大槌へは、橋野川を下り、危険なつるぎの難所を超えて、鶴のすまいに出て、海岸ぞいに山を越えて行かなければならなかった。小さな寺で、寺の中にだけいるわけでもない鞭牛さまの行動範囲は、となりの寺、あちらの村と、次第にひろまっていた。出歩くことが多くなるにつれて、彼のカンが働きはじめるのであった。

オイネガ森の山を越えたら、そこは小槌川だ。そこから川ぞいに下れば大槌町である。そう考えて山に入ってみて、谷を見おろしてみると、近道はできそうであった。彼は一人、くわやなたを手にして樹を切り、道をつけてみた。何日かかったか定かではないが、その近道は完成した。

いつしか村人の知るところとなり、小枝街道とよばれた。

これが、鞭牛さま最初の道路開削であった。寛延三年、四十一歳のときである。宮古市から南西に向かって、長沢川という川がある。その上流の川目部落は宿場であった。

この川目の近くには、金山、沢金山があつて繁昌していた土地であり、鞭牛さまがもつとも親しんだところであつた。しかも、その奥には奇岩怪石が屹立<sup>きつりつ</sup>して、神秘的な雰囲気をもっていたので、鞭牛さまはここにくると、一種の安堵感をおぼえるのであつた。

何のついでであつたが、宝暦元年の正月は長沢山の洞窟で、座禪をしてすごした。まだはつきりしない己れ自身の問いかけを、更にみつめるよい機会であつた。

無量なり仏は人を思うとも人は仏を思わざりけり

宝暦元年の正月は想像をこえた大雪であつた。この雪に、農民は不安をおぼえた。また今年も凶作であろうか。

だがこの年は、凶作ではなく津波であつた。

前年に小枝街道を開削したことで、鞭牛さまの体内には、何をなさねばならないかという問いがふくらんでいた。

それが何であるか、いまようやく見えはじめたのである。百姓の子であり、牛方であり、山道を歩きつづけることの方が気やすかつた鞭牛さまにとって、人々を救う仏の慈悲を、自分にできることは何であるか、それが見えはじめていたのである。

宝暦四年、山田町大沢の鈴木門助は、何人かの同志とはかつて、大沢川に橋をかけた。

四月、七月とたてつづけに二つの橋をかけた。鞭牛さまもまた、その橋を通つた。そこで村人の喜ぶ声を聞いた。

あそこに橋があつたらどんなに便利なことか。鞭牛さまは、ふつと北川目の長沢川を思い出していた。

あくる年の宝暦五年三月に、鞭牛さま花輪村長沢の北川目に橋をかけた。誰の協力もない、たった一人の作業だつた。そこには、今でも橋供養碑が建っている。鞭牛さまの、はじめての供養碑建立である。

この年、宝暦五年は乙亥年<sup>きのとい</sup>であつた。乙亥年の元日に日蝕があるという風説は、前の年からひろまっていた。元日の日蝕は天下の不吉であるという不安は、前の年の秋ごろよりおこり、京都、江戸はもちろん、年末には、ここ奥羽の山間にまで、口から口へと伝わっていた。民衆の不安は、すでに放置しかねるものになっていた。

幕府は、七十年の間用いてきた貞享暦を廃して、新たに宝暦暦を採用することによつて、元日を変更させることを考えた。

しかし、それでも民衆の不安はさらなかった。

六十一年前の乙亥年は、元禄八年である。やはり元日に日蝕があり、こんにち、南部五

大飢饉の第一回目として記録されている年である。七月十三日からふきはじめた風で、稲の花はことごとく散って、それから日をおって冷氣となり、ついに大飢饉となった。お救い小屋は、盛岡の東顕寺門前などに二、三あつたけれど、多くの人は死んでしまった。南部藩中での餓死者は、五万人であつた、と記録は伝えている。

この土地の老人たちにとって、それは忘れがたい恐怖の思い出であつた。

その元禄八年は江戸で大火があり、六万七千四百戸を焼き、伊豆に噴火のおこつた年である。

忘れかけていた悲劇の元禄八年から、暦が一巡した。今年は何かがおこる、という不安と重くするしい空気の中で宝暦五年という年が明けていった。

(つづく)